

『程氏家塾読書分年日程』訳注稿（九）

松野 敏之・中嶋 諒

本稿は、朱子学研究会の読書会で扱った程端礼『程氏家塾読書分年日程』の訳注を試みるもので、本誌一三号からの連載である。読書会の参加者は以下の通りであり、本稿は担当者（氏名の上に「※」を表記）の草稿を元に作成している。

宮下和太（麗澤大学モラロジー研究所専任研究員）・阿部光麿（早稲田大学講師）・大場一央（明治大学講師）・小池直（早稲田大学院博士後期課程）・田村有見恵（早稲田大学院博士後期課程）・原信太郎（アレシヤンドレ（早稲田大学院博士後期課程）・佐々木仁美（明治大学付属明治高等学校・中学校教諭）
・上村新治（早稲田大学院修士課程修了）・※中嶋諒（学習院大学学長付国際研究交流オフィスPD共同研究員）・※松野敏之（國士舘大学専任講師）

【凡例】

- ・ 底本には常熟瞿氏鐵琴銅劍樓藏元刊本（四部叢刊所収）を用い、叢書集成本（清刊本・正誼堂全書本）・四庫全書本との校異を示した。但し、煩を避けるため、異体字・通假字・同義語の類の異同は割愛した。
- ・ 解釈には、『程氏家塾讀書分年日程』（昌平叢書所収）および姜漢椿校注『程氏家塾讀書分年日程』（黃山書社出版、一九九二年四月）を参照した。
- ・ 訳注は、原文・校異・注釈・通釈の順で並ぶ。
- ・ 原文・訳文中の「」を附した部分は、底本では割注に相当する。
- ・ 注釈で引用した原文には「」を附して訓読を示した。但し、一読して明らかな場合には省略している。
- ・ 訳文中で（ ）を附した部分は、訳者の補注である。

【『程氏家塾讀書分年日程』卷三（底本 卷三・十六丁表一行）卷三・二十四丁裏九行】

假借序^{a(1)}

夾漈鄭樵^{b(2)}

六書之難明者、爲假借之難明也。六書無傳、惟藉說文。然許氏惟得象形、諧聲二書以成書、牽於會意、復爲假借所擾、故所得者、亦不能守焉。學者之患、在於識有義之義、而不識無義之義。假借者、無義之義也。假

借者、本非已有、因他所授、故於已爲無義。然就假借而言之、有有義之假借、有無義之假借、不可不別也。曰同音借義、曰協音借義、曰因義借音、曰因借而借、此爲有義之假借。曰借同音不借義、曰借協音不借義、曰語辭之借、曰五音之借、曰三詩之借、曰十日之借、曰十二辰之借、曰方言之借、此爲無義之假借、先儒所以顛沛淪於經籍之中、如汎一葦於溟渤、靡所底止、皆爲假借之所魅也。嗚呼、六書明、則六經如指諸掌。假借明、則六書如指掌。

〔校異〕

a 假借序：叢書集成本、「假借序」の上に「鄭樵」の二字あり。 b 夾漈鄭樵：叢書集成本、此の四字無し。 c 淪於：叢書集成本、「淪胥於」に作る。四庫全書本、「沉淪」に作る。 d 指掌：叢書集成本、「指諸掌」に作る。

〔注釈〕

(1) 仮借序：『通志』卷三四・六書略、仮借第六に所収。以下「凡此借類計五百九十八」まで六書略からの引用となる。六書略については、本誌第一五号五九頁参照。なお六書略を含む『通志』のいわゆる二十略は、王樹民点校『通志二十略』（中華書局、一九九五年一月）に評点、及び校勘記を附す。併せて参照されたい。

(2) 夾漈鄭樵：鄭樵、夾漈は字。本誌第一七号二七〇頁参照。

(3) 協音：協韻に同じ。本来異なる韻が、同一の韻として通じる韻をいう。本誌第一六号一四二頁参照。

〔通釈〕

仮借序

夾漈 鄭樵
まようさいていしやう

六書を明らかにし難いのは、仮借を明らかにし難いためである。

六書については伝がなく、『説文解字』を手がかりとする他はない。しかし許慎は象形・形声の六書中の二書のみで『説文解字』の書を著し、会意も引くけれども、結局仮借に混乱させられてしまっている。だから理解しているところについてもまた、よく分からなくなっている。

学ぶ者の弊害は、その字固有の意味は分かっているが、その字に本来はない意味を分かっている、ということにある。仮借は、その字に本来はない意味である。仮借は、本来その字自体が意味をもっているのではなく、他の字に与えられた意味によっている。だから、その字自体には意味がないのである。さて仮借について言うと、意味をもつ仮借もあり、意味をもたない仮借もあり、分別しないわけにはいかない。「音が同じで意味を借りている仮借」、「音が通じて意味を借りている仮借」、「意味に拠って音を借りている仮借」、「仮借に拠ってさらに借りている仮借」、これらは意味をもつ仮借である。「同音の字を借りて意味を借りていない仮借」や「協音の字を借りて意味を借りていない仮借」、「助字の仮借」、「五音の仮借」、「三詩の仮借」、「十日の仮借」、「十二辰の仮借」、「方言の仮借」、これらは意味をもたない仮借である。

先儒がつまづき、経籍の中に淪没してしまう理由は、一本の葦を大海に浮かべると止まるところがないように、みな仮借に惑わされてしまっているからである。ああ、六書が明らかであれば、六経は掌を指すように明らかである。仮借が明らかであれば、六書は掌を指すように明らかである。

同音借義

初〔裁衣之始、而爲凡物之始。〕 基〔築土之本、而爲凡物之本。〕 始〔女子之初、而爲凡物之初。〕
本〔木之基、而爲凡物之基。〕 小〔水之微也、凡微者皆言小。〕 永〔水之長也、凡長者皆言永。〕
牛〔爲牝牡、而牝牡通於畜獸。〕 佳〔爲雌雄、而雌雄通於鳥雀。〕 狀〔本犬之形、而爲凡物之狀。〕
物〔本牛之事、而爲凡事之物。〕 駕〔馬言駕、凡驅乘皆曰駕。〕 牧〔牛言牧、凡豢養皆曰牧。〕
落〔木曰落、而爲墮落之落。〕 零〔雨曰零、而爲飄零之零。〕 英〔本英華之英、而爲飾物之英。〕
苦〔本苦良之苦、而爲滋味之苦。〕 蔓〔本藤蔓之蔓、而爲蔓衍之蔓。〕 爻〔乃交疏之爻、而爲爻象之爻。〕
希〔乃疏希之希、而爲希少之希。〕 柞〔本柞木之柞、而爲芟柞之柞。〕 鑿〔本金鑿之鑿、而爲疏鑿之鑿。〕
旋〔反旋也、而爲回旋之旋。〕 戲〔兵交也、而爲嬉戲之戲。〕 平〔氣之平也、而爲均平之平。〕
封〔爵土之封也、而爲封殖之封。〕 戚〔斧也、而爲親戚之戚。〕 塵〔土也、而爲塵積之塵。〕
賢〔多財也、而爲賢良之賢。〕 妃〔嘉偶也、而爲后妃之妃。〕 純〔絲也、而爲純全之純。〕
茸〔草也、而爲虋茸之茸。〕 珣〔夷玉也、而玉器亦謂之珣。〕 蘆〔葦也、而薺根亦謂之蘆。〕
饒〔食之餘也、而爲饒衍之饒。〕 約〔絲之束也、而爲儉約之約。〕

凡此之類、竝同音借義者也。

右三十五。

〔校異〕

a 凡：叢書集成本、「而」に作る。 b 疏希：底本、「疎巾」に作る。叢書集成本に拠って改めた。 c 財
：叢書集成本・四庫全書本、「材」に作る。

〔注釈〕

(1) 夷玉：東方の美玉。『尚書』顧命に「大玉、夷玉、天球、河図在東序」「大玉、夷玉、天球、河図は東序に在り」とあり、『經典釈文』に引く馬融は「東夷之美玉」と解する。

〔通釈〕

音が同じで意味を借りている仮借

初「衣服を裁断する始め。あらゆる物事の始まりとなる。」 基「土台を築く根本。あらゆる物事の根本となる。」

始「初めに生まれた女子（長女）。あらゆる物事の初めとなる。」 本「樹木の根本ねもと。あらゆる物事の基礎となる。」

小「小さな河川。あらゆる微細なものは、みな「小」という。」 永「長大な河川。あらゆる長大なものは、みな「永」という。」

牛「牛の牝牡。牝牡は家畜・野獸すべてに通用する。」 佳「佳（尾の短い鳥）の雌雄。雌雄は鳥類すべてに通用する。」

状「もと犬の形状。あらゆる物の形状となる。」 物「もと牛のこと。あらゆる事のものとなる。」
駕「馬（に乗ること）を「駕」という。駆乗する 牧「牛（を飼育すること）を「牧」という。飼育す

ことは全て「駕」と称する。」

落「木（の葉などが落ちること）を「落」という。

墮落の「落」となる。」

英「もと英華（美しい花）の「英」。装飾の美し

さとなる。」

蔓「もと藤蔓の「蔓」。蔓衍（蔓延）の「蔓」と

なる。」

希「疏希（まばらで少ない）の「希」。希少の「希」

となる。」

鑿「もと金鑿（金属の鑿）の「鑿」。疏鑿（疏水

を鑿つ）の「鑿」となる。」

戲「武器が交わること。嬉戲（たわむれ遊ぶ）の

「戲」となる。」

封「爵土（爵位と封土）の「封」。封殖（土寄せ

して栽培する）の「封」となる。」

塵「土。塵積（積もった塵）の「塵」となる。」

ることは全て「牧」と称する。」

霽「雨（が降ること）を「霽」という。飄霽（ただ

よい落ちる）の「霽」となる。」

苦「もと苦良（苦しみたのしみ）の「苦」。味わ

いの苦みとなる。」

交「交疏（交流が浅い）の「交」。『易』の爻象の

「爻」となる。」

柞「もと柞木（樹木を伐る）の「柞」。芟柞（草を

刈る）の「柞」となる。」

旋「反旋（折り返す）。旋回の「旋」となる。」

平「気が平らかであること。平均の「平」となる。」

戚「斧。親戚の「戚」となる。」

賢「財貨が多いこと。賢良（徳行にすぐれた人）の

「賢」となる。」

賢「財貨が多いこと。賢良（徳行にすぐれた人）の

「賢」となる。」

翁 [毛也、而爲翁老之翁。] 題 [額也、而爲題名之題。] 薄 [本林薄之薄、而爲涼薄之薄。]

蒹 [本蒹茂之蒹、而爲蒹祿之蒹。] 登 [豆也、而爲升登之登。] 干 [盾也、而爲干犯之干。]

革 [皮也、而爲更革之革。] 鞫 [革囊也、而爲鞫養之鞫。] 難 [禽也、而爲難易之難。]

雍 [禽也、而爲雍和之雍。] 湊 [水也、而爲室家湊湊之湊。] 棣 [移也、而爲威儀棣棣之棣。]

丁 [當也、而爲椽之丁丁之丁。] 薨 [卒也、而爲度之薨薨之薨。] 胥 [蟹醢也、而爲相胥之胥。]

方 [竝舟也、而爲方所之方。] 節 [竹目也、而爲節操之節。] 管 [竹箛也、而爲主管之管。]

韋 [相違也、而爲皮革之韋。] 質 [相易也、而爲眈。矐之質。禮質質然來。] 財 [貨也、而爲財成之財。易財成天地之道。]

休 [憩也、而爲休美之休。] 時 [辰之時、而爲時是之時。]

齋 [財之齋、而爲齋咨之齋。易、齋咨涕洟。] 夢 [寐也、而爲雲夢之夢。] 風 [虫之風、而爲吹噓之風。]

晉 [光明也、而爲晉國之晉。] 勿 [州里之旗也、而爲勿不之勿。] 出 [花英也、而爲出入之出。]

字 [養之字、而爲文字之字。] 久 [距也、而爲久遠之久。]

凡此之類、竝同音不借義者也。

右四十五。

〔校異〕

a 額：叢書集成本、「額」に作る。 b 豆也而爲升登之登：叢書集成本、「豆也而爲豆、登、作登、升登之登、升登、作登、

に作る。 c 眈：四庫全書本、「眈」に作る。 d 時：叢書集成本、「是」に作る。 e 光：底本、「先」

に作る。叢書集成本・四庫全書本に拠つて改めた。

〔注釈〕

(一) 齋財之齋而爲齋咨之齋：『通志』は「財之齋而爲齋咨之齋」の九字を小字双行注とせず、冒頭の「齋」字とともに「齋財の齋にして、齋咨の齋と爲す」とする。以下「時辰之時」、「風虫之風」、「字養之字」云々の箇所も同じ。

〔通釈〕

同音の字を借りて意味を借りていない仮借

汝〔河川（汝水）。爾汝の「汝」となる。〕

爾〔花が盛んなさま。『毛詩』（小雅・采薇）に「彼

の爾んなるは維れ何ぞ、維れ常の華なり」とある。爾汝の「爾」となる。〕

示〔旗。神示の「示」となる。〕

業〔大きな板。事業の「業」となる。〕

牢〔檻。牢固の「牢」となる。〕

畜〔牧畜。畜聚（たくわえる）の「畜」となる。〕

它〔蛇の類。它人（他人）の「它」となる。〕

蚤〔虱の類。蚤夜（早朝と夜中）の「蚤」となる。〕

為〔母猿。作為の「為」となる。〕

率〔鳥を捕らえる柄のついた網。率循の「率」。〕

来〔麦。往來の「来」となる。〕

易〔虫（蜥蜴）の類。変易の「易」となる。〕

能〔熊の類。賢能の「能」となる。〕

黽〔蛙。黽勉（勉め励む）の「黽」となる。〕

翁〔毛。老翁の「翁」となる。〕

題〔額。題名の「題」となる。〕

薄「もと林薄（草やぶ）の「薄」。涼薄（浅薄）」

の「薄」となる。」

登「高坏（祭器）。升登の「登」となる。」

革「皮。更革の「革」となる。」

難「鳥類のこと。難易の「難」となる。」

湊「水（の湊まる湊）。「室家湊湊（家々が湊まるさま）」（『毛詩』小雅・無羊）の「湊」となる。」

なる。」

丁「当たること。「椽之丁丁（杭を打つ音が丁丁と鳴り響く）」（『毛詩』周南・兔置）の「丁」となる。」

となる。」

胥「蟹醢。胥吏の「胥」となる。」

節「竹のふし目。節操の「節」となる。」

韋「違（あう）こと。韋皮の「韋」となる。」

休「憩うこと。休美（麗しいさま）の「休」となる。」

る。」

蒹「もと蒹茂（草木が繁茂する）の「蒹」。蒹葭（福

祿）の「蒹」となる。」

干「盾。干犯の「干」となる。」

鞫「革の袋（鞫）。鞫養の「鞫」となる。」

雍「鳥類のこと。雍和の「雍」となる。」

棣「移（庭梅の一種）。「威儀棣棣（威儀の整っているさま）」（『毛詩』魯頌・泮水）の「棣」となる。」

なる。」

薨「卒去すること。「度之薨薨（とどろき響くさま）」（『毛詩』大雅・緜）の「薨」となる。」

となる。」

方「並んだ舟。方所の「方」となる。」

管「竹の筒（管）。主管の「管」となる。」

貿「取り替えること。矐味の「貿」となる。『礼記』

（檀弓下）に「貿貿然として来る」とある。」

財「財貨。財成（うまく処理する）の「財」となる。」

る。『周易』（泰・象伝）に「天地の道を財成

す」とある。」

齋さい財さい（金品）の「齋」。齋し咨し（嘆息の声）の時「時辰の「時」。時はの「時」となる。」

「齋」となる。『周易』（萃・象伝）に「齋

咨、涕洟ていす」とある。」

晋「光明。晋国の「晋」となる。」

夢「寝る（時にみる夢のこと。雲夢（湖北・湖南

にまたがる大湿地帯）の「夢」となる。」

風「風（が吹いて生まれる）虫の「風」。吹ふ嘘く

字「字やしな養の「字」。文字の「字」となる。」

風のこととなる。」

勿「州里の旗。勿なれ” 不ず”（否定詞）の「勿」出「花房。出入の「出」となる。」

となる。」

久「距てる。永久の「久」となる。」

これらの類は、みな同音の字を借りて意味を借りていない仮借である。

右、四十五字。

協音借義

旁へ「之爲去聲。」

中「之爲去聲。」

上「之爲時掌切。」

下「之爲胡嫁切。」

分「之爲去聲。」

少「之爲去聲。」

歸「之爲音饋。」

遺「之爲惟季切、與也。」

御₂「之爲音迓、爲禦。」

行「之爲下孟切、戶浪切。」

數₃「色主切。之爲戶故切、色角切。」

趨「之爲七六切、側九切。春秋傳、賓將趨。鄭康成讀。」咽「之爲音燕、又一結切。」

蕃「音蕃、樊也。之爲音煩。」

蕪「之爲亡甫切。」

徹「通也。之爲直列切。」

斂「之爲去聲。」

蔓「藤也。之爲莫干切、蔓菁。」

吹「之爲去聲。」

呼「之爲去聲、又呼賀切。春秋傳呼役夫。」

噍「才笑切、嚼也。之爲音焦。禮、志微噍之音。又子流切、禮、燕雀啁噍之頃。」

否「之爲音鄙、臧否。部鄙切、否泰。」

喧「之爲上聲。詩云、赫兮喧兮。」

趣「之爲平聲、又七口切。周官、有趣馬。」幾「居希切、之爲音冀。春秋傳、庸可幾乎。又渠希切、近也。」

樂「之爲五教切、又音洛。」

華「今作花。之爲音譁、榮也。又去聲、聚也。」

鄭「作管切、聚也。之爲音贊、南陽縣名。在河切、沛縣名。」

空「之爲音孔、窟也。又苦貢切、詩、不宜空我師。」從「之爲才用切、又七容切、從容、閒暇也。」

比「毘至切。之爲音皮、和也。上聲、方也。蒲必切、次也。音芘、朋也。」

放「之爲上聲。」

敖「音遨。之爲音傲。」

背「脊也。之爲音佩、違也。」

衡「橫木。之爲音橫。」

筓「之爲私閏切、筓輿也。」

塞「之爲去聲、塞垣。」

奇「之爲居宜切、奇偶。」

嘉「之爲戶嫁切。春秋傳、公賦嘉樂。」

枝「之爲音岐。」

栽「之爲音在、築也。」

回「古文雷字。之爲、亦作迴、繞也。」

暴「步卜切、灼也。之爲去聲、虐也。」

桑「稷屬。之爲才細切。禮、桑醴在堂。元音咨。」

鹽「之爲去聲。」

定「之爲丁侯切。詩、定之方中。」

仰「之爲去聲。」

并「之爲去聲。」

伏「之爲去聲。禮、羽者嫗伏、毛者孕育。」

裨「補支切。之爲婢支切、副也。」

厭「之爲去聲。」

辟「必益切、君也。之爲蒲益切、法也。」

覺「之爲古孝切、夢覺也。」

驩「之爲仕救切。」

麗「之爲力之切。詩云、魚麗於罟。」

靡「之爲平聲。」

閒「之爲去聲。」

援「之爲平聲、引也。」

折「之列切。之爲士列切。」

女「之爲尼句切。」

妻「之爲去聲。」

姓「之爲音生。春秋傳、蔡公孫歸姓。」

孫「之爲音遜。」

純「之爲之尹切、緣也。」

總「之爲子公切。詩、素絲五總。」

織「之爲隻吏切、微也。詩、織文鳥章。」

累「之爲力僞切。」

土「之爲音杜。詩、徹彼桑土。」

壞「之爲音怪。」

錢「之爲上聲。詩、痔乃錢鏹。」

鍼「音針。之爲其兼切。」

親「之爲去聲、婚姻相謂。」

賓「之爲去聲、客以禮會曰賓。」

衣「之爲去聲。」

冠「之爲去聲。」

枕「之爲去聲。」

飲「之爲去聲。」

食「之爲時吏切。」

膏「之爲古到切。詩、羔裘如膏。」

熏〔之爲去聲。〕

陰〔之爲去聲。〕

輕〔之爲去聲。春秋傳、戎輕而不整。〕

離〔之爲去聲。〕

兩〔之爲去聲。詩、葛屨五兩。〕

沈〔之爲去聲。〕

量〔之爲去聲。〕

三〔之爲去聲。論語、三思而後行。〕

左〔上聲。之爲音佐。〕

右〔上聲。之爲音佑。〕

先〔之爲去聲。〕

後〔之爲去聲。〕

遠〔之爲去聲。〕

近〔之爲去聲。〕

復〔之爲扶又切。〕

重〔平聲。之爲去聲。〕

度〔之爲徒洛切。〕

長〔之爲去聲。〕

廣〔之爲去聲。〕

染〔之爲去聲。〕

縫〔之爲去聲。〕

別〔彼列切。之爲皮列切。〕

斷〔都管切。之爲徒管切。〕

盡〔即忍切。之爲慈忍切。〕

解〔之爲胡買切、通也。〕

相〔之爲息亮切。〕

走〔之爲去聲。書、矧威奔走。〕

奔〔之爲逋悶切。〕

散〔之爲去聲。〕

和〔之爲去聲。〕

凝〔之爲去聲。〕

冰〔之爲彼凭切。〕

彊〔之爲其亮切。〕

箸〔之爲陟畧切、直畧切。〕

施〔之爲式鼓切、以鼓切。〕

冥〔之爲去聲。〕

煎〔之爲去聲。〕

炙〔之爲之夜切。〕

收〔之爲式救切。〕

當〔之爲去聲。〕

悔〔之爲去聲。〕

應〔平聲。之爲去聲。〕

帥〔之爲所類切。〕

監〔之爲去聲。〕

使〔之爲去聲。〕

守〔之爲去聲。〕

任〔之爲平聲。〕

勝〔之爲平聲。〕

爭〔之爲去聲。〕

迎〔之爲去聲。〕

選	〔之爲去聲。〕	聽	〔之爲平聲。〕	論	〔之爲平聲。〕
知	〔之爲音智。〕	思	〔之爲去聲。〕	便	〔之爲平聲。〕
好	〔之爲去聲。〕	令	〔之爲平聲。〕	教	〔之爲平聲。〕
語	〔之爲去聲。〕	怨	〔之爲平聲。〕	衆	〔之爲平聲。〕
雨	〔之爲去聲。〕	種	〔之爲去聲。〕	緣	〔之爲去聲。〕
張	〔之爲去聲。〕	藏	〔之爲去聲。〕	處	〔之爲去聲。〕
乘	〔之爲去聲。〕	卷	〔之爲上聲。〕	祝	〔之爲之又切。〕
傳	〔之爲去聲。〕	聞	〔之爲去聲。〕	稱	〔之爲平聲。〕
譽	〔之爲平聲。〕	勞	〔之爲去聲。〕	興	〔之爲去聲。〕
與	〔之爲去聲。〕	繫	〔之爲古詣切。〕	遲	〔之爲去聲。〕
屬	〔之爲章玉切。〕	含	〔之爲去聲。〕	遣	〔之爲去聲。禮有遣奠。〕
引	〔以忍切。之爲余刃切。〕	臨	〔之爲去聲。〕	假	〔之爲古訝切。春秋、不以禮假人。〕
借	〔之爲入聲。〕	貸	〔之爲入聲。〕	敗	〔之爲音拜。〕
見	〔之爲胡甸切。〕	告	〔之爲古祿切。禮、出必告。〕	養	〔之爲去聲。〕
共	〔之爲音恭。〕	去	〔之爲上聲。〕	喪	〔之爲去聲。〕
忘	〔之爲去聲。〕	恐	〔之爲丘用切。〕	射	〔之爲食亦切。〕
取	〔之爲七句切。禮、聞取於人。〕	大	〔之爲音泰。〕	焉	〔之爲於乾切。〕

會「之爲音檜。」

披「之爲上聲。」

降「之爲戶江切。」

覆「之爲甫六切。」

朝「之爲直遙切。」

刺「之爲入聲。」

奉「之爲音捧。」

父「扶雨切。之爲音甫。」

子「之爲將吏切。禮、子庶民也。」

凡此之類並協音而借義者也。

右二百八

〔校異〕

a 音：底本、此の字無し。叢書集成本に拠つて改めた。 b 一：叢書集成本、「以」に作る。 c 噍：四庫全書本、「噍殺」に作る。 d 才：叢書集成本、「財」に作る。 e 放之爲、上聲：叢書集成本・四庫全書

本、此の五字が先の「空く詩不宜空我師」の後ろに入る。 f 裁：叢書集成本・四庫全書本、「裁」に作る。

g 支：叢書集成本・四庫全書本、「之」に作る。 h 平：叢書集成本、「去」に作る。 i 隻：四庫全書

本、「雙」に作る。 j 累之爲、力偽切：叢書集成本・四庫全書本、此の六字無し。 k 古：叢書集成本・

四庫全書本、「旨」に作る。 l 切：叢書集成本、此の字無し。 m 上：叢書集成本、「去」に作る。

〔注釈〕

(1) 旁之爲去聲：『通志』は「之爲」の二字を小字双行注とせず、「旁之爲旁」「去聲」に作る。すなわち「旁」字を動詞として用いる場合には、去声で読むという意味。『通志』「協音借義」の項に載せる

一八九字のうち八割以上を占める一五二字が、この「A之爲A〔くく〕」の形を取る。

(2) 御之爲音迓爲禦：『通志』は「御之爲御」「音迓」爲御、「音禦」に作る。すなわち「御」字には動詞

として「迓」「禦」の音を持つという意味。『通志』「協音借義」の項では、他に「行」「趨」等の一〇字が、この「A之爲A」〔〜〕、爲A〔〜〕（爲A〔〜〕……）の形を取る。

(3) 數色主切之爲戸故切色角切：『通志』は「數」「色主切」之爲數、「戸故切」、爲數、「色角切」に作る。「色主の切」の音を持つ「數」字は、動詞としては「戸故の切」や「色角の切」の音を持つことを述べる。『通志』「協音借義」の項では、他に「徹」「蔓」等の二十四字が、この「A」〔〜〕之爲A〔〜〕（爲A〔〜〕……）の形を取る。

(4) 鄭康成……鄭玄（一一七〜二〇〇）。康成は字。諸經に精通し、『周易』『尚書』『毛詩』『儀礼』『礼記』『周礼』『論語』『孝經』などに注を施し、「駁五教異義」など多くの著作を遺した。

(5) 右二百八：実際には一八九字が見えるのみ。『通志』も同様。
〔通釈〕

音が通じて意味を借りている仮借

旁「『旁^よ』は、去声となる。」中「『中^あつ』は、去声となる。」上「『上^上』は、時掌^上の切となる。」

下「『下^下』は、胡嫁^五の切となる。」分「『分^分つ』は、去声となる。」

少「『少^かく』は、去声となる。」歸「『歸^五る』は、音、饋^五となる。」

遺「『遺^{おく}る』は、惟季^五の切となる。与えるの意。」御「『御^五す』は、音、迓^五となり、（音、）禦^五となる。」

行「『行^行ふ』は、下孟^五の切となり、戸浪^五の切となる。」

數「色主^上の切。『數^上ふ』は、戸故^五の切となり、色角^人の切となる。」

趨「趨る」は、七六の切となり、側九の切となる。『春秋（左氏）伝』（昭公二十年）に「賓將に趨せんとす」とあり、鄭玄は「掖は、夜を行る」と解釈する。」

咽「咽む」は、音、燕となり、一結の切となる。」

蕃「音は藩。樊のこと。蕃る」は、音、煩となる。」

蕪「蕪す」は、亡甫の切となる。」

斂「斂む」は、去声となる。」

蔓「藤蔓のこと。蔓る」は、莫干の切となる。蔓菁（カブラ）のこと。」

吹「吹く」は、去声となる。」

呼「呼す（「ああ」と声を発する）」は、去声となり、また呼賀の切となる。『春秋（左氏）伝』（文公

元年）に「呼、役夫」とある。」

噍「才笑の切、噍むこと。噍たり（差し迫った声のさま）」は、音、焦となる。『礼記』（楽記）に「志微噍殺（

微かでせわしい）の音」とある。また、子流の切となる。『礼記』（三年問）に「燕雀……啁噍（さ

えずり鳴く）の頃」とある。」

否「否たり」は、音、鄙となる。臧否（よしあし）の意。あるいは部鄙の切となる。否泰（不順と順

調）の意。」

喧「喧しい」は、上声となる。『毛詩』（衛風・淇澳）に「赫兮、喧兮」とある。」

趣「趣る」は、平声。また、七口の切となる。『周礼』（夏官・司馬）に、趣馬の官がある。」

幾「居希の切。幾ふ」は、音、冀となる。『春秋（左氏）伝』（宣公十二年）に「庸て幾ふべけんや」とある。また、渠希の切となる。近いこと。」

樂「樂しむ、樂む」は、五教の切となる。また、音は洛となる。」

華「いま「花」に作る。「華たり」は、音、譁となる。榮えること。また去声となる。聚まること。」

鄼「作管の切、聚まること。「鄼たり」は、音、贊となる。河南南陽県の地名。あるいは在河の切となる。」

江蘇沛県の地名。」

空「空しうす」は、音、孔となる。ほら穴の意。また苦貢の切となる。『毛詩』（小雅・節南山）に「宜

しく我が師を空しうすべからず」とある。」

從「從にす、從ふ」は、才用の切。また、七容の切となる。ゆつたりとして落ち着いていること。」

比「毘至の切。「比す」は、音、皮となる。和すること。上声となる。比べること。蒲必の切となる。順

序立てること。音、苙となる。ともがらのこと。」

放「放ふ」は、上声となる。」 敖「音は遨。「敖る」は、音、傲となる。」

背「背中のこと。「背す」は、音、佩となる。違ふの意。」

衡「横木のこと。「衡る」は、音、横となる。」

筍「筍たり」は、私閭の切となる。筍輿（竹製のこし）の意。」

塞「塞たり」は、去声となる。塞垣（とりで）の意。」

奇「奇たり」は、居宜の切となる。奇数偶数（の「奇」）の意。」

嘉「嘉たり」は、戸嫁（五）の切となる。『春秋（左氏）伝』（文公三年）に「公嘉樂を賦す」とある。」

枝「枝（五）る」は、音、岐（五）となる。」 栽「栽（五）う」は、音、在（五）となる。築（五）くこと。」

回「古文は「雷」の字。「回（五）る」は、また「迴」字に作る。繞ること。」

暴「歩（五）トの切。灼（五）らかにする、さらすの意。「暴（五）す」は、去声となる。虐（五）げるの意。」

棗「きびの類。「棗（五）たり」は、才細（五）の切となる。『礼記』（礼運）に「棗（五）醒（五）堂（五）に在り」とある。もと音は咨。」

塩「塩（五）す（塩漬けにする）」は、去声となる。」

定「定（五）たり」は、丁佞（五）の切となる。『毛詩』（鄘風・定之方中）に「定（五）の方（五）に中す」（定星＝二十八宿の一である室宿が南中する）とある。」

仰「仰（五）ぐ」は、去声となる。」 井「井（五）ぶ」は、去声となる。」

伏「伏（五）す（卵（五）を孵（五）す）」の「伏」は、去声となる。『礼記』（楽記）に「羽（五）ある者は嫗（五）伏（五）し（鳥が翼で卵を覆い温める）、毛ある者は孕（五）育（五）す」とある。」

裨「補（五）之の切。「裨（五）す」は、婢支（五）の切となる。助けるの意。」 厭「厭（五）ふ」は、去声となる。」

辟「必益（五）の切。君主の意。「辟（五）たり」は、蒲益（五）の切となる。掟（五）に法（五）ること。」

覚「覚（五）む」は、古孝（五）の切となる。夢から目覚めること。」 驩「驩（五）る」は、仕救（五）の切となる。」

麗「麗（五）る」は、力（五）之の切となる。『毛詩』（小雅・魚麗）に「魚（五）留（五）に麗（五）る」とある。」

靡「靡（五）す（尽きる、分ける）」は、平声となる。」 間「間（五）つ」は、去声となる。」

援「援く」は、平声となる。引くこと。」

折「之列の切。折す」は、士列の切となる。」

女「女す」は、尼句の切となる。」

妻「妻す」は、去声となる。」

姓「姓（生）む」は、音、生となる。『春秋（公羊）伝』（定公四年経）に「蔡の公孫婦姓」とある（『左

伝』では「蔡公孫婦生」と、「姓」を「生」字に作っている。）

孫「孫（遜）る」は、音、遜となる。」

純「純たり」は、之尹の切となる。縁、もしくはへり、をつけるの意。」

総「総たり」は、子公の切となる。『毛詩』（召南・羔羊）に「素糸五総」とある。」

織「織たり」は、双吏の切となる。徹（はたじるし）の意。『毛詩』（小雅・六月）に「織文は鳥の章」とある。」

累「累ふ」の「累」は、力偽の切となる。」

土「土たり」は、音、杜となる。『毛詩』（豳風・鴟鴞）に「彼の桑土（桑の根）を徹す」とある。」

壞「壞る」は、音、怪となる。」

錢「錢たり」は、上声となる。『毛詩』（周頌・臣工之什）に「乃の錢罇（鋤・鍬）を庠」とある。」

鍼「音は針。鍼す」は、其兼の切となる。」

親「親たり」は、去声となる。婚姻による親族（姻戚）の意。」

賓「賓たり」は、去声となる。礼をもって客と会することを「賓」という。」

衣「衣る」は、去声となる。」

冠「冠す」は、去声となる。」

枕「“枕す”は、去声となる。」

飲「“飲す”は、去声となる。」

食「“食ふ”は、時吏の切となる。」

膏「“膏す”は、古到の切となる。『毛詩』（檜風・羔裘）に「羔裘膏すが如し」とある。」

熏「“熏（燻）す”は、去声となる。」

輕「“輕たり”は、去声となる。『春秋（左氏）伝』（隱公九年）に「戎は輕（迅速）にして整はず」とある。」

ある。」

離「“離（著）く”は、去声となる。」

兩「“兩たり”は、去声となる。『毛詩』（齊風・南山）に「葛屨五兩」（葛のく、つが五対）とある。」

沈「“沈たり”は、去声となる。」

三「“三たびす”は、去声となる。『論語』（公冶長）に「三たび思ひて而る後に行ふ」とある。」

左「“上声。左（佐）く”は、音、佐となる。」

先「“先んず”は、去声となる。」

遠「“遠ざく”は、去声となる。」

復「“復たびす”は、扶又の切となる。」

度「“度る”は、徒洛の切となる。」

広「“広くす”は、去声となる。」

縫「“縫ふ”は、去声となる。」

別「“彼列の切。別つ”は、皮列の切となる。」

染「“染む”は、去声となる。」

長「“長たり”は、去声となる。」

重「“平声。重んず”は、去声となる。」

近「“近づく”は、去声となる。」

後「“後る”は、去声となる。」

右「“上声。右（佑）く”は、音、佑となる。」

量「“量たり”は、去声となる。」

量「“量たり”は、去声となる。」

断〔都管[●]の切。〕断つ[●]は、徒管[●]の切となる。〕 尽〔即忍[●]の切。〕尽[●](儘)す[●]は、慈忍[●]の切となる。〕
 解〔解す[●]は、胡買[●]の切となる。通ずること。〕 相〔相[●]る、相[●]く[●]は、息亮[●]の切となる。〕
 走〔走[●]る[●]は、去声となる。『尚書』(君爽)に「矧[●]た威奔[●]走[●]す」とある。〕
 奔〔奔[●]る[●]は、逋悶[●]の切となる。〕 散〔散[●]る[●]は、去声となる。〕
 和〔和[●]す[●]は、去声となる。〕 凝〔凝[●]る[●]は、去声となる。〕
 氷〔氷[●]る[●]は、彼凭[●]の切となる。〕 彊〔彊[●](僵)る[●]は、其亮[●]の切となる。〕
 箸〔箸[●](着)く[●]は、陟略[●]の切となり、直略[●]の切となる。〕
 施〔施[●]す[●]は、式鼓[●]の切となり、以鼓[●]の切となる。〕
 冥〔冥[●]たり[●]は、去声となる。〕 煎〔煎[●]たり[●]は、去声となる。〕
 炙〔炙[●]る[●]は、之夜[●]の切となる。〕 収〔収[●]む[●]は、式救[●]の切となる。〕
 当〔当[●]つ[●]は、去声となる。〕 悔〔悔[●]ゆ[●]は、去声となる。〕
 応〔平声。〕応[●]ふ[●]は、去声となる。〕 帥〔帥[●]ある[●]は、所類[●]の切となる。〕
 監〔監[●]る[●]は、去声となる。〕 使〔使[●]ひす[●]は、去声となる。〕
 守〔守[●]る[●]は、去声となる。〕 任〔任[●]ふ[●]は、平声となる。〕
 勝〔勝[●]ふ[●]は、平声となる。〕 争〔争[●](諍)む[●]は、去声となる。〕
 迎〔迎[●]ふ[●]は、去声となる。〕 選〔選[●]ぶ[●]は、去声となる。〕
 聴〔聴[●]く[●]は、平声となる。〕 論〔論[●]ず[●]は、平声となる。〕

知「知あり」は、音、智五となる。』
 便「便へんふ」は、平声となる。』
 令「令しむ」は、平声となる。』
 語「語つぐ」は、去声となる。』
 衆「衆おほし」は、平声となる。』
 種「種うう」は、去声となる。』
 張「張ちやうる」は、去声となる。』
 処「処とこあり」は、去声となる。』
 卷「卷まく」は、上声となる。』
 伝「伝でん（経伝）あり」は、去声となる。』
 称「称ねず」は、平声となる。』
 勞「勞ねまふ」は、去声となる。』
 与「与あづか」は、去声となる。』
 遲「遲ま（待）つ」は、去声となる。』
 含「含くわ（含み玉）あり」は、去声となる。』
 遣「遣おく」は、去声となる。『礼記』には遣奠の礼を載せる。』
 引「以忍じゆんの切。引ひく」は、余刃五の切となる。』 臨「臨りんむ」は、去声となる。』
 思「思しあり」は、去声となる。』
 好「好こうむ」は、去声となる。』
 教「教しむ」は、平声となる。』
 怨「怨うらむ」は、平声となる。』
 雨「雨うふる」は、去声となる。』
 縁「縁ふちどる」は、去声となる。』
 藏「藏そうあり」は、去声となる。』
 乘「乘じやう（乗り物）あり」は、去声となる。』
 祝「祝のろ（呪）ふ」は、之又五の切となる。』
 聞「聞き（名声）あり」は、去声となる。』
 誉「誉よほむ」は、平声となる。』
 興「興きようぶ」は、去声となる。』
 繫「繫かく」は、古詣この切となる。』
 属「属ぞくす」は、章玉あの切となる。』

仮〔「仮す」は、古訝●の切となる。『春秋（左氏伝）』（莊公十八年）に「礼を以て人に仮さず」とある。〕

借〔「借す」は、入声となる。〕
貸〔「貸る」は、入声となる。〕

敗〔「敗る」は、音、拜●となる。〕
見〔「見る」は、胡甸●の切となる。〕

告〔「告ぐ」は、古禄●の切となる。『礼記』（曲礼上）に「出づるには必ず告ぐ」とある。〕

養〔「養ふ」は、去声となる。〕
共〔「共にす」は、音、恭○となる。〕

去〔「去む」は、上声となる。〕
喪〔「喪ふ、喪ぶ」は、去声となる。〕

忘〔「忘る」は、去声となる。〕
恐〔「恐る」は、丘用●の切となる。〕

射〔「射る」は、食亦●の切となる。〕

取〔「取る」は、七句●の切となる。『礼記』（曲礼上）に「人に取らるるを聞く」とある。〕

大〔「大たり」は、音、泰●となる。〕
焉〔「焉たり」は、於乾○の切となる。〕

会〔「会す」は、音、檜●となる。〕
披〔「披く」は、上声となる。〕

降〔「降る」は、戸江○の切となる。〕
覆〔「覆す」は、甫六●の切となる。〕

朝〔「朝す」は、直遥○の切となる。〕
刺〔「刺す」は、入声となる。〕

奉〔「奉ず」は、音、捧●となる。〕
父〔「扶雨の切。父たり」は、音、甫●となる。〕

子〔「子とす」は、将吏●の切となる。『礼記』（中庸）に「庶民を子とするなり」とある。〕

これらの類は、みな音が通じて意味を借りている仮借である。

右、二百八字。

借協音不借義

荷「之爲胡可切、負也。」

鮮「之爲上聲、少也。」

菑「側其切、田也。之爲音災。」

苴「七余切、麻也。之爲子餘切、苞苴。」

屯「之爲徒門切。」

个「之爲音介、副也。禮、明堂有左右个。又音幹、禮、人爲侯上兩個與其身三。」

召「之爲、音邵。」

句「之爲古侯切。又古候切。詩、敦弓既句。」

台「音怡、我也。之爲音胎、星名。又音臺。春秋、季孫宿救台、范甯讀。」

咽「之爲音淵、詩、伐鼓咽咽。」

登「之爲音得、春秋、登來。」

邪「琅邪、地名。之爲邪正之邪。」

微「古堯切。之爲古弔切、邊微。」

說「之爲音悅。」

茹「茹蘆切、茅蒐也。之爲去聲、度也。」

燕「之爲平聲。」

竟「之爲音境。」

旁「之爲補彭切。詩、四介旁旁。」

莫「音暮。之爲模各切、又音陌。春秋傳、德正應和曰莫。」

番「附袁切、獸足。之爲音翻、次也。音波、番番、勇也。」

調「之爲徒弔切、品調。又陟留切、詩云、怒如調飢。」

正「音征、射侯之正也。之爲去聲。」

追「之爲丁回切、追琢也。」

訐「之爲音榻。詩、川澤訐訐。」

信「之爲音伸。」

識「之爲音志。」

說「之爲音悅。」

信「之爲音伸。」

樊〔之爲音盤、樊纓。〕
 占〔之爲去聲。〕
 雅〔今作鴉。之爲上聲。〕
 鳥〔之爲音島。〕
 脫〔之爲音退。詩、舒而脫脫兮。〕
 委〔之爲於偽切、委積。〕
 箭〔音簫。之爲音朔、象箭以舞。〕
 盛〔音成。之爲去聲。〕
 鄉〔之爲音嚮。〕
 旋〔之爲音選、鍾縣。〕
 栗〔之爲音裂、苗栗也。〕
 俾〔之爲普計切、俾倪。〕
 兄〔之爲況^m。詩、倉兄填兮。〕
 驕〔之爲許喬切。詩、載獫歇驕。〕
 肩〔之爲上聲、春秋、我心肩肩。〕
 耿〔工迥切、光也。之爲古幸切。耿耿、憂也。〕
 振〔之爲平聲。詩、振振公子。〕

革〔之爲紀力切、急也。〕
 甫〔之爲音圃、甫田。〕
 瞿〔九遇切、驚也。之爲平聲、戟類。〕
 脩〔脯也。之爲音卣、中尊。〕
 創〔音瘡、傷也。之爲去聲。〕
 女〔之爲音汝。〕
 簿〔蠶曲。之爲簿書。〕
 索〔之爲生革切。〕
 昭〔之爲音韶。〕
 盟〔之爲音孟、盟津。〕
 齊〔之爲音咨、齊衰。〕
 北〔音佩。之爲入聲、方也。〕
 弁〔之爲蒲官切。詩、小弁。〕
 薦〔之爲音荐。詩、天方薦瘥。〕
 閒〔之爲音閑。〕
 拒〔之爲音矩。招拒、白帝。〕
 揖〔之爲子入切。詩、蠡斯羽揖揖兮。〕

殺〔之爲去聲、降殺。〕
 省〔昔井切。之爲所景切。〕
 肺〔之爲音沛。詩、其葉肺肺。〕
 予〔之爲音與。〕
 削〔之爲音肖、刀室。〕
 平〔之爲辨年切。〕
 稽〔之爲音啓、稽首。〕
 游〔之爲音流、旌游也。〕
 貫〔之爲古患切、習也。〕
 冒〔之爲莫比切、貪也。〕
 屏〔之爲上聲。〕
 縣〔平聲。之爲去聲。〕
 麋〔麋也。之爲丘隕切、衆也。〕

螿〔之爲尺十切。詩、宜爾子孫蟄蟄兮。〕

紀〔之爲起。詩、有紀有堂。〕

縱〔之爲平聲。〕

絮〔之爲救慮切。禮、毋絮羹。〕

繆〔之爲音穆、謚也。〕

紕〔音屈。之爲音詘。〕

軒〔之爲音憲。禮、野豕為軒。〕

隊〔之爲音墜。〕

斤〔之爲紀覲切。斤斤、明也。〕

險〔之爲音儉。春秋傳、險而易行。〕

舍〔之爲音捨。〕

王〔于況切、之爲平聲。〕

宿〔之爲思宥切、星也。〕

要〔之爲去聲。〕

風〔之爲音諷。〕

夏〔胡賈切、中夏也。之爲胡嫁切、冬夏也。〕

鞠〔毬也。之爲音麴。又音芎、鞠藭。〕

卷〔之爲音袞。禮、三公一命卷。又音拳。禮、執女手之卷然。又起權切、冠武也。〕

鬻〔亦作粥。之爲音育、賣也。居六切。詩、鬻子之閔斯。〕

殿〔音奠。之爲丁見切。又音店。詩、民之方殿屎。〕

將〔之爲去聲。又七羊切。詩、將仲子。〕

敦〔之爲都隊切、玉敦。又都回切。詩、敦彼獨宿。徒本切、渾敦。〕

肉〔之爲而救切。禮、寬裕肉好之音。而注切、豐肉而短。〕

臙〔凶武切、大臙。之爲亡古切。詩、則無臙仕。音膜、詩民雖靡臙。〕

從〔之爲則庸切、從衡。七容切、從容。又音縱。又音總。禮、爾無從從爾。〕

耆「之爲音嗜。又音底。」

衰「衰經。之爲楚危切、等衰。又衰微。」

貉「之爲音陌、狄也。又音馮。」

辟「必益切、君也。之爲音避。又音弭、止也。又音裨。禮、素帶終辟。又音僻。禮、負劍辟咄。」

厭「於鹽切。之爲于葉切。詩、厭浥行露。又音壓。禮、死而不弔曰厭。於驗切、服也。」

率「捕鳥之具。之爲將帥之帥、亦作率。又音律、約也。」

凡此之類、竝協音不借義者也。

右一百三十三

〔校異〕

- a 竟之爲音境：叢書集成本・四庫全書本、此の五字が後の「苴く苞苴」の後ろに入る。 b 餘：叢書集成本
- ・四庫全書本、「余」に作る。 c 四：叢書集成本、「駟」に作る。 d 禮：叢書集成本、此の字無し。
- e 有：叢書集成本・四庫全書本、此の字無し。 f 人：叢書集成本・四庫全書本、「梓人」に作る。 g 獸
- 足：四庫全書本、「獸足也」に作る。 h 古侯切又古侯切：叢書集成本、「古侯古又侯、翻切」に作る。 i
- 救：叢書集成本、「救」に作る。 j 春秋：叢書集成本、「春秋傳」に作る。 k 音：底本・四庫全書本、
- 此の字無し。叢書集成本に拠つて改めた。 l 旌游：四庫全書本、「旌游之旌」に作る。 m 況：四庫全書
- 本、「悅」に作る。 n 春秋：叢書集成本、「春秋傳」に作る。 o 詘：底本、「紕」に作る。四庫全書本、
- 「拙」に作る。叢書集成本に拠つて改めた。 p 居六切：叢書集成本、「又居六切」に作る。 q 音膜：叢
- 書集成本、「又音模」に作る。 r 咄：叢書集成本、「弭」に作る。

〔注釈〕

(1) 稽首：九拜の一つで、膝を屈し、頭を地面にしばらくつけて敬礼すること。頭を地面に打ちつける頓首とともに最も重い礼。『周礼』春官・宗伯に「弁九拜、一曰稽首、二曰頓首、三曰空首、四曰振動、五曰吉祥、六曰凶拜、七曰奇拜、八曰褒拜、九曰肅拜、以享右祭祀」とある。

(2) 招拒：讖緯家のいう五帝のうち、西方の神で、白帝と称される。『周礼』天官・祀五帝の賈公彦疏に「為東方青帝靈威仰、南方赤帝赤熛怒、中央黄帝含枢紐、西方白帝白招拒、北方黒帝汁光紀」とある。

(3) 死而不弔曰厭：『礼記』檀弓上には、「死而不弔者三、畏厭溺」〔死して弔はざる者三あり、畏と厭と溺と〕とある。

(4) 右一百三十三：実際には一〇五字が見えるのみ。『通志』仮借略も同様。

〔通釈〕

協韻の字を借りて意味を借りていない仮借

荷〔「荷ふ」は、胡可の切となる。負うこと。〕

茹〔「茹蘆の切。茅蒐（あかね草）のこと。茹る」は、去声となる。度ること。〕

鮮〔「鮮なし」は、上声となる。少ないこと。〕 燕〔「燕たり」は、平声となる。〕

薄〔「薄る」は、必各の切となる。迫ること。〕

笛〔「笛たり」は、側其の切となる。田畑のこと。音、災となる。〕

竟〔「竟ふ」は、音は境となる。〕

苴〔七余の切。麻のこと。〕苴たりは、子餘の切となる。苞苴ほうしよ（包みと敷き物）のこと。

旁〔旁たり〕は、補彭の切となる。『毛詩』（鄭風・清人）に「駟介旁旁」（戦車が勢いよく戦場を駆け巡る）とある。〕

屯〔屯す〕は、徒門の切となる。〕

莫〔音は暮。〕莫たりは、模各の切となり、また音は陌人となる。『春秋（左氏）伝』（昭公二十八年伝）

に「徳正しく応和するを莫と曰ふ」とある。〕

介〔介たり〕は、音、介五となる。副うこと。『礼記』（月令）には、明堂に「左介」「右介」がある。ま

た、音は幹五。『周礼』（冬官・梓人）に「（梓）人を侯と為す、……上两个と其の身と三」とある。〕

召〔召たり〕は、音、邵五となる。〕

番〔附表の切。獸の足のこと。〕番たりは、音、翻〇となる。また音は波〇となる。番番は、勇ましいさま。〕

句〔句す〕は、古侯の切、また古侯の切となる。『毛詩』（大雅・行葦）に「敦弓既に句す（塗り弓が

いっばいに引き絞られた）とある。〕

台〔音は怡。我のこと。〕台たりは、音は胎〇となる。星の名（三台）。また音は臺〇。「季孫宿救台」（季

孫宿 台を救ふ）とあるのを、范寧はこう読んでいる。〕

咽〔咽たり〕は、音、淵〇となる。『毛詩』（魯頌・有駟）に「鼓を伐つこと咽咽たり」とある。〕

調〔調たり〕は、徒弔の切となる。品格のこと。また、陟留の切となる。『毛詩』（周南・汝墳）に「慇

として調飢の如し（飢えて朝食をとつていないかのように）とある。〕

登「『登す』は、音、得と^入なる。『春秋（公羊伝）』（隱公五年）に「登來」とある。」
 正「音は征。弓の的の中心。『正す』は、去声となる。」
 邪「琅邪の地名のこと。『邪なり』は、邪正の「邪」となる。」
 追「『追す』は、丁回の切となる。玉を磨くこと。」
 微「古堯の切。『微たり』は、古弔の切となる。辺境（の砦）のこと。」
 訐「『訐たり』は、（音、）棚と^上なる。『毛詩』（大雅・韓奕）に「川沢訐訐たり」とある。」
 說「『說ぶ』は、音、悦と^入なる。」
 信「『信ぶ』は、音、伸と^入なる。」
 樊「『樊たり』は、音、盤と^入なる。樊纓（馬に装着する腹帯と胸掛）のこと。」
 革「『革る』は、紀力の切となる。さし迫ること。」
 殺「『殺ぐ』は、去声となる。少しずつ減ること。」
 占「『占む』は、去声となる。」
 甫「『甫たり』は、音、圃と^上なる。甫きな田（の「甫」の意）。」
 省「昔井の切。『省く』は、所景の切となる。」
 雅「いま「鴉」に作る。『雅なり』は、上声となる。」
 瞿「九遇の切。驚き恐れること。『瞿たり』は、平声となる。戈戟（三つまたの矛）の類。」
 鳥「『鳥たり』は、音、島と^上なる。」

識「『識す』は、音、志と^五なる。」

脩〔肺脩(干し肉)のこと。脩たり〕は、音、酋となる。酒樽のこと。〕

肺〔肺たり〕は、音、沛となる。『毛詩』(陳風・東門之楊)に「其の葉肺肺たり」とある。〕

脱〔脱たり〕は、音、退となる。『毛詩』(召南・野有死麋)に「舒にして脱脱たり」とある。〕

創〔音は瘡。傷のこと。創む〕は、去声となる。〕

予〔予たり/予ふ〕は、音、与となる。〕

委〔委す〕は、於偽の切となる。積み蓄えること。〕

女〔女たり〕は、音、汝となる。削〔削たり〕は、音、肖となる。刀の鞘のこと。〕

箛〔音は簫。箛たり〕は、音、朔となる。象箛(楽器)を手にして舞うこと。〕

簿〔蚕簿(蚕が繭を作るときの足場にするもの)。簿たり〕は、帳簿のこと。〕

平〔平らぐ〕は、弁年の切となる。盛〔音は成。盛る〕は、去声となる。〕

索〔索む〕は、生革の切となる。稽〔稽す〕は、音、啓となる。稽首すること。〕

郷〔郷ふ〕は、音、嚮となる。昭〔昭らかなり〕は、音、韶となる。〕

游〔游たり〕は、音、流となる。旂のこと。〕

旋〔旋たり〕は、音は選となる。鐘を掛ける取っ手のこと。〕

盟〔盟たり〕は、音、孟となる。盟津(今の河南省孟県)のこと。〕

貫〔貫ふ〕は、古患の切となる。習うこと。栗〔栗く〕は、音、裂となる。刀で裂くこと。〕

斉〔斉たり〕は、音、咨となる。齊衰(一年の喪に用いる喪服)のこと。〕

冒〔「冒す」は、莫比の切となる。食ること。〕
 俾〔「俾（睥）む」は、普計の切となる。睥睨すること。〕
 北〔音は佩。〕北たりは、入声となる。方角のこと。〕
 屏〔「屏く」は、上声となる。〕
 兄〔「兄たり」は、音、況となる。『毛詩』（大雅・桑柔）に「倉兄（愴愴）として埴たり」とある。〕
 弁〔「弁たり」は、蒲官の切となる。『毛詩』に（小雅・小弁）がある。〕
 隰〔平声。〕隰たりは、去声となる。〕
 驕〔「驕たり」は、許喬の切となる。『毛詩』（秦風・駟驪）に「狡と歇驕（短い口の獵犬）とを載す」とある。〕
 薦〔「薦たり」は、音、荐となる。『毛詩』（小雅・節南山）に「天方に薦瘞す」とある。〕
 麋〔麋（シカ科の哺乳動物）。〕麋るは、丘隕の切となる。衆く（むらがる）こと。〕
 肩〔「肩らかなり」は、上声となる。『春秋（左氏伝）』（襄公五年）に「我が心肩肩」とある。〕
 閒〔「閒たり」は、音、閑となる。〕
 耿〔「工迥の切。光り輝くこと。』耿たり」は、古幸の切となる。「耿耿」は、憂えること。〕
 拒〔「拒たり」は、音は矩となる。「招拒（秋・西方を司る五帝の一）」は、白帝のこと。〕
 振〔「振たり」は、平声となる。『毛詩』（周南・麟之趾）に「振振たる公子」とある。〕
 揖〔「揖たり」は、子入の切となる。『毛詩』（周南・蠡斯）に「蠡斯の羽揖揖たり」とある。〕

蟄「『蟄たり』は、尺十の切となる。『毛詩』(周南・蝻斯)に「宜なり、爾の子孫蟄蟄たり」とある。」

紀「『紀たり』は、(音、)起となる。『毛詩』(秦風・終南)に「紀有り堂有り」とある。」

縦「『縦たり』は、平声となる。」

絮「『絮ふ』は、救慮の切となる。『礼記』(曲礼上)に「羹を絮ふる母かれ」とある。」

繆「『繆たり』は、音、穆となる、諡(の記された位牌)のこと。」

紕「音は屈。『紕ふ』は、音、詘となる。」

軒「『軒たり』は、音、憲となる。『礼記』(内則/少儀)に「野豕を軒(大切り)と為す」とある。」

隊「『隊(墜)』は、音、墜となる。」

斤「『斤たり』は、紀觀の切となる。「斤斤」は、明らかなさま。」

險「『險たり』は、音、儉となる。『春秋』(左氏)伝「襄公二九年」に「險(儉約)にして行ひ易し」とある。」

舍「『舍(捨)』は、音、捨となる。」

王「『于況の切。』王たり』は、平声となる。」

宿「『宿たり』は、思宥の切となる。星宿のこと。」

要「『要む』は、去声となる。」

風「『風(諷)』す』は、音、諷となる。」

夏「胡賈の切。中夏(中華)のこと。「夏たり』は、胡嫁の切となる。季節としての冬夏のこと。」

鞫「毬のこと。「鞫ふ』は、音、麴となり、また音は芎となる。鞫まること。」

卷「『卷たり』は、音、袞となる。『礼記』(王制)に「三公は一命して卷す(礼服を着る)」とある。ま

た音は拳。『礼記』(檀弓下)に「女の手の卷然(柔らかく美しいさま)たるを執る」とある。また起権の切。冠の下帯のこと。」

鬻 [また「粥」字に作る。鬻ぐは、音、育となる。売ること。(また、)居六の切。『毛詩』(豳風・鴟鵂)に「子を鬻へること之れ閑し」とある。]

殿 [音は奠。殿すは、丁見の切となる。また、音は店となる。『毛詩』(大雅・板)に「民の方に殿屎す」とある。]

将 [将いひるの「将」は、去声となる。また、七羊の切となる。『毛詩』(鄭風・将仲子)に「将ふ仲子」とある。]

敦 [敦たりは、都隊の切となる。玉製の食器のこと。また、都回の切となる。『毛詩』(豳風・東山)に「敦たる彼の独宿」とある。徒本の切。渾敦(渾沌)たるさま。]

肉 [肉たりは、而救の切となる。『礼記』(楽記)に「寛裕肉好(順成和動)の音」とある。而注の切。『周礼』冬官・弓人に「豊肉にして短」とある。]

膾 [凶武の切。大きな肉の切り身。膾たりは、亡古の切となる。『毛詩』(小雅・節南山)に「則ち膾く仕へる無し」とある。音は膜。『毛詩』(小雅・小旻)に「民膾いなること靡しと雖も」とある。]

従 [従たりは、則庸の切となる。従衡のこと。七容の切。従容のこと。また、音は縦となる。また音は総。『礼記』(檀弓上)に「爾従従爾(高く大きいさま)なる母れ」とある。]

啻 [音は嗜。嗜となる。また、音は底。]

衰さいてつ「衰経（三年の喪に用いる喪服）のこと。衰そくぐは、楚危その切となる。等衰する（等級にそつて規模をそぐ）こと。また衰微さいのこと。」

貉はく「貉たり」は、音、陌まとなる。狄てき（北方の異民族）のこと。また、音は禡まとなる。」

辟はく「必益ひやくの切。君主のこと。辟た（譬）ふは、音、避ひとなる。また音は弭み。止めること。また音は裨ひ。

『礼記』（玉藻）に「素帶そたい終辟しゆうひつす（縁取る）」とある。また音は僻ひくとなる。『礼記』（曲礼上）に「負劍辟へき呬じす（身をかがめて（幼児に）話しかける）」とある。」

厭えん「於塩えんの切。厭えんす（しつとりととうるおう）」は、干葉かんの切となる。『毛詩』（召南・行露）に「厭浥えんたる（濡れ湿りたる）行の露」とある。また、音は庄しゆうとなる。『礼記』（檀弓上）に「死して弔はざるに、厭えん（庄死）と曰ふ」とある。於驗えんの切。心服すること。」

率しゆう「鳥を捕える道具のこと。率しゆうるは、將軍が帥しゆういることで、「率」字にも作る。また音は律りつ。大約のこと。」

これらの類は、みな協韻の字を借りて意味を借りていない仮借である。

右、百三十三字。

因義借音

琢たく「本琢玉之琢、而爲大圭不琢之琢、音冢。」

輅らく「本車輅之輅、而爲狂狡輅鄭人之輅、音迓。」

惡〔以有惡也、故可惡、去聲。〕

內〔以其內也、故可內、音納。〕

佚〔夷質切、縱也、而爲佚宕之佚、音迭。〕

伯〔長也、而爲伯王之伯、音霸。〕

幃〔帳也、而爲覆幃之幃、音燾、春秋傳如天之無不幃。〕

幕〔帷也、而爲幕覆之幕、音覓。〕

蓼〔本莊。蓼之蓼、而爲蓼彼蕭斯之蓼、力竹切。〕

錚〔本金錚之錚、音淳、而爲公矛沃錚之錚、徒對切。〕

術〔邑中道也、以其所行、故爲鄉術之術、音遂。〕

羸〔秦姓也、以其所居、故爲羸水之羸、音爲。〕

嘯〔嘯呼之嘯、而爲指嘯之嘯、音叱。〕

跛〔跛躄之跛、彼我切、而爲跛倚之跛、彼義切。〕

副〔普通切、剖也、而爲副貳之副。〕

承〔奉也、而爲賻承之承、音贈。〕

甄〔吉然切、本甄陶之甄、而爲聲甄之甄、音震、禮薄聲甄。〕

封〔本封土之封、而爲封棺之封、音窆、禮縣棺而封。〕

齊〔本齊一之齊、而爲齊莊之齊、側皆切。〕

巡〔本巡行之巡、而爲相巡之巡、音緣、禮始終相巡。〕

推〔本推與之推、而爲推挽之推、土回切。〕

搏〔本搏攝之搏、徒端切、而爲搏束之搏、除轉切、禮百羽爲搏。〕

獻〔本獻享之獻、而爲獻尊之獻、素何切。〕

衰〔本雨衣之衰、素何切、而爲衰經之衰、音崔。〕

櫬〔本音毳、以其義通於橋、故又音橋。〕

凡此之類、竝因義借音。

〔校異〕

a 帳：四庫全書本、「長」に作る。 b 紅：叢書集成本・四庫全書本、「紅」に作る。 c 爲：叢書集成本、「嬌」に作る。四庫全書本、「盈」に作る。 d 賻：叢書集成本、「博」に作る。 e 相：四庫全書本、「遂」に作る。 f 始終：四庫全書本、「終始」に作る。 g 毳：叢書集成本、「擻」に作る。 h 橋：底本、「橋」に作る。叢書集成本・四庫全書本に拠つて改めた。

〔通釈〕

意味に拠つて音を借りている仮借

琢「もと琢玉（玉を琢く）の「琢」。「大圭は琢せず」（『礼記』礼器／郊特性）の「琢」となる。音は篆^{●上}。」
 輅「もと車輅（天子の車）の「輅」。「狂狡 鄭人を輅ふ」（『春秋左氏伝』宣公二年）の「輅」となる。音は迂^{●去}。」

悪「悪というものがあつたために、悪むことができる。去声。」

内「内側があるために、内れることができる。音は納^{●入}。」

佚「夷質の切。縦つ（すておく）の意。佚宕（とらわれないさま）の「佚」となる。音は迭^{●入}。」

伯「長、年長者。伯王（霸王）の「伯」となる。音は霸^{●去}。」

幘「幘、覆幘（覆うこと）の「幘」となる。音は燕^{●去}。『春秋（左氏）伝』（襄公二十九年）に「天の幘は

ざる無きが如し」とある。」

幕とばり 帷とばり 幕覆（覆うこと）の幕となる。音は覓●人。」

蓼おおけたて 「もと荏蓼の「蓼」。蓼たる（長く大きなさま）彼の蕭か（『毛詩』小雅・蓼蕭）の「蓼」となる。力竹●人の切。」

鍔 「もと金属製の鍔じゆんう于（釣鐘に似た打楽器）の「鍔」。音は淳。「忸矛きゆうぼう鍔たい（いしづき）を沃よくす」（『毛詩』秦風・小戒）の「鍔」となる。徒対●五の切。」

術 「村の中の道。道を行くことによつて、郷術（郊外の集落）の「術」となる。音は遂●五。」

嬴 「秦（の王室）の姓。秦の王室の居所によつて、嬴水の「嬴」となる。音は為●人。」

嘯しやうこ 「嘯呼（息を長く引き吐く）の「嘯」。指嘯しじつ（叱る）の嘯となる。音は叱●人。」

跛 「跛躄（足が不自由なこと）の「跛」。彼我●上の切。跛倚ひい（片足でものに寄りかかる）の「跛」となる。

副 「普通●人の切。剖さくこと。副貳ぶじ（補佐、補佐役）の「副」となる。」

承 「承奉（命を承けて仕えること）。贖承の「承」となる。音は贈●五。」

甄けんとう 「吉然の切。もと甄陶（土をこねて陶器を作る）の「甄」。声甄せいけんの「甄」となる。音は震●五。『周礼』（春官・典同）に「薄声甄しんたり（震い動く）」とある。」

封 「もと封土ほうどの「封」。封棺の「封」となる。音は窆●上。『礼記』（檀弓上）に「棺を梟か（懸）けて封ず（墓におさめる）」とある。」

齐 「もと齊せい一の「齊」。齊莊せいせう（恭しく嚴かなさま）の「齊」となる。側皆の切。」

巡「もと巡行の「巡」。相巡の「巡」となる。音は縁。『礼記』（祭義）に「始終相ひ巡る」とある。」
推「もと推与の「推」。推挽の「推」となる。土回の切。」

搏「もと搏撰（集める）の「搏」。徒端の切。搏束（たばねる）の「搏」となる。除転の切。『周礼』（地官・羽人）に「百羽を搏と為す」とある。」

献「もと献享（ごちそうしてもてなす）の「献」。献尊（翡翠で飾った酒樽）の「献」となる。素何の切。」

衰「もと雨具の衰（蓑）。素何の切。衰経（三年の喪に用いる喪服）の「衰」となる。音は崔。」

櫂「もと音は櫂（櫂）。その意が橋に通じるので、また音は橋。」

これらの類は、みな意味に拠って音を借りている仮借である。

右、二十五字。